

小中一貫校（義務教育学校等）におけるメリット・デメリット

※「義務教育学校」とは

学校教育制度の多様化と弾力化を推進するため、小学校から中学校までの義務教育を一人の校長と一つの教職員組織が9年間の学校教育目標を決め、一貫した教育を行うことを趣旨とし2016年から制度化された新たな学校種です。

メリット	デメリット
<p>中1の壁の緩和・解消・系統性を意識した小中一貫教育、異学年交流による精神的な発達が望めます</p>	<p>中高一貫教育との整合性が取れない。リーダーシップや自主性を養う機会が減る（小学校高学年の時期）、9年間で人間関係が固定化しやすい。</p>
<p>・義務教育学校の教育の特例【義務教育学校】 通常の小中学校では「学びを保証」するため、各学年の1年間で学ぶ内容・時間等が法律で定められています。しかし、義務教育学校では、9年間を一つの「学びの場」と考えるため、指導内容や基準をかえることはできませんが、子供達の実態や理解程度、また、9年間の指導内容の系統性を考え、指導する時期（学年）や指導時数を柔軟に考えことを可能とする「特例」が認められています。</p>	<p>・小学校卒業の達成感がない 義務教育学校の場合には小学校と中学校が1つの学校になるため、小学校卒業の達成感がなくなります。前期課程修了による修了式を行うことで卒業式を代替する場合がありますが、学校が変わる卒業式と修了式では達成感に差が生じます。子供にとって1つの区切りを超えた、成長したと実感できる機会が減ることになります。</p>
<p>・学年段階の区切りを6-3以外に柔軟にできる【義務教育学校】 現在の学校制度では、学年段階の大きな区切りは必然的に小学校と中学校の「6-3」になりますが、義務教育学校では、9年間の中で独自の大きな区切を設けて子供達の発達段階に応じて、効果的な教育課程を組み児童生徒の指導を行うことが可能となります。 H27年度調査：「4-3-2」の区切を行う学校が57%。「6-3」の区切が18%</p>	<p>・中学校の新鮮さがない 小学校と中学校の段差をなくすことで、中1の壁や小中ギャップと呼ばれる状況が解消されますが、段差をなくし1つの学校とした結果、中学校の新鮮さが失われます。新しい学校に通うことで、やるきが出たり、心機一転したり、人間関係が大きく変わったりしますが、新鮮さがなくなり変化のきっかけの一つが失われてしまいます。</p>
<p>・柔軟性・連続性を意識した小中一貫教育 小中一貫校では系統的・継続的な学習によって教育効果が高まることが期待されます。特に校舎一体型の義務教育学校では、教科内や教科間の関連性を意識した指導順序や指導内容を考えたり、児童生徒にとって理解が難しく、つまづきやすい内容は定められた学年以外でも繰り返し指導したり、関連性の高い内容については前の学年で時間を割いて重点的に丁寧な指導をするなど工夫が可能となります。</p>	<p>・小1と中3は差があり交流に課題がある 義務教育学校では、学校行事など様々な学校の活動を通じて異学年の交流や学年の縦割り活動などが行われます。しかし、小1のような低学年と中3のような高学年では発達段階に差があり配慮が必要となります。</p>
<p>・中1の壁・小中ギャップの緩和・解消 小学校と中学校では学習環境・生活環境・人間関係などが大きく変化するため、生徒が変化に対応しきれない中1の壁、小中ギャップという問題があります。小中を1つの学校にした義務教育学校では、小学校と中学校の間の段差を緩和することができ、小学校教育から中学校教育への円滑な移行を促すことが可能となり、中1の壁や小中ギャップと呼ばれる問題が緩和・解消する効果が期待されます。</p>	<p>・中学生相当の生徒の悪影響の恐れ 一般的に中学生の段階になると、精神的に発達し、思春期・第二次反抗期にあたる時期となるため、不登校やいじめ、暴力事件などの問題が増えやすくなる可能性があります。中学生相当の生徒の行動や振る舞いが小学生相当の生徒の発達に悪影響を及ぼす恐れがあり、学校側の教育上の配慮が重要となります。 ※先進校では、中学生相当の生徒が逆に優しくなり、下級生の面倒見がよくなるという傾向も伺っています</p>
<p>・異学年交流による精神的な発達 小学1年生から中学3年に相当する生徒が同じ学校で学ぶことから何らかの交流の機会が持たれます（施設隣接型・分離型でも同様）。1年生から9年生までの生徒が学校行事などを通じて異学年交流を行うことによって上級生から下級生に対する思いやりの心、上級生・下級生の規範意識、下級生から上級生に対する憧れの気持ちなどの醸成が期待され、精神的な発達や社会的な育成の効果も期待されます。</p>	<p>・リーダーシップや自主性を養う機会が減る 学校集団の中で高学年（小学5・6年、中学3年）になると、学校行事などにおいて重要な立場となり、リーダーシップや自主性が養われます。しかし、義務教育学校では小学校段階の5・6年生は高学年ではなく、中学生となってしまいうため、リーダーシップや自主性を養う機会が減ってしまいます。 ※運動会など学校行事において、中学生ではなく、5・6年生を主体に運営することで、リーダーシップを磨く機会に取組む場合もあります</p>
<p>・継続的な生徒に対する指導 義務教育学校は小学校と中学校が1つの学校となり、9年間継続して生徒に対する指導が行われます。そのため教員間で生徒の情報を共有しやすく、生徒指導を効果的に行うことができるようになります。生徒の個性に応じたきめ細やかな丁寧な生徒指導が可能となります。</p>	<p>・人間関係が9年間固定化しやすい クラス替えがある場合においても、9年間同じ生徒の構成で過ごすことになり、人間関係が固定しやすくなり、一度からかひの対象となる、弱い立場に追い込まれる、仲間はずれになるなどの立場となった場合、その状況が固定化され、立ち直る機会が得られない場合があります。</p> <p>・休み時間に低学年の生徒が委縮する可能性 義務教育学校では、休み時間に運動場などの施設で遊ぶ場合、低学年の生徒と高学年の生徒と一緒に遊ぶと身体能力の差によって危険が生じる場合があるほか、低学年の生徒が遠慮・委縮して遊べない恐れも生じます。</p>